

大津4号(おおつよんごう)

登録番号：種苗名称登録 第312号
登録年月日：昭和52年9月
登録者：大津祐男（神奈川県足柄下
郡湯河原町吉浜）

育成者：大津祐男
来歴：「十万温州」の珠心胚実生

特性

「大津4号」は旧農産種苗法の時代に登録された。旧法による登録期間も過ぎているし新品種とはいえなかもしれない。しかし、高品質を指向する産地では、今も増殖が続けられている。古くて新しい品種といって良いであろう。

高品質の果実を産するいわゆる高糖系温州として広く栽培されているのは「青島温州」とその変異系である。この青島温州系と「大津4号」は拮抗的關係にあるようで、「青島温州」の多い静岡と熊本のと県では「大津4号」は極めて少ない。「大津4号」は発生地 of 神奈川県はもちろんであるが、中四国や九州の諸県で増殖されている。とくに、九州の佐賀、長崎、大分では奨励され、急激な伸びをみせている。

「大津4号」は育成者の大津祐男氏が昭和39年に「十万温州」の種子をまき、珠心胚実生を育成して、その中から選抜した品種である。珠心胚実生には、親品種よりも熟期が早くなるものがしばしば現われる。突然変異であろう。本品種も親の「十万温州」よりも熟期が早まり、11月下旬には完全着色し収穫できる。「十万温州」よりも早く収穫できるので、隔年結果も少なくなった。本品種が普及した当初は高接ぎで増殖されたが、なり初めが遅いという苦情があった。これは実生から発生した品種につきまとう性質である。十分に成熟し成人(木)になれば解消することである。最近、このような苦情を聞かないので、「大津4号」もようやく成人になったのであろう。

早熟化したため、着色は早くなり、完全着色果を採取できるようになった。「十万温州」に比べ、減酸は早い、糖の蓄積はひけをとらない。平成2年度の佐賀県産の「大津4号」を調査したところ、糖度15.2、クエン酸1.1であった。果形指数は145で、「十万温州」同様に極めて扁平である。

荒駒であった「十万温州」が早熟化して作りやすくなった本品種を十分に乗りこなす技術は必要であるが、適地は広い。普通温州の適地であった従来の排水のよい傾斜地の産地では、ビニルマルチなどの最近開発された技術を用いることにより、「大津4号」の特産地を形成することができるであろう。

(岩政正男)